

報告

# 平成24年度事業委員会主催「宿泊研修会」開催

岡田 包儀

## 1. はじめに

去る9月14・15日の両日、北海道本部事業委員会主催(オホーツク技術士会共催)の宿泊研修会が実施された。本号では、宿泊研修会の内容を報告致します。

## 2. 事業委員会主催「宿泊研修会」

### (1)実施概要

日時：2012年(平成24年)9月14日(金)～15日(土)  
 参加者数：18名、主な見学先：網走方面を主に見学  
 見学工程のあらまし

9月14日

- a) 網走港ケーソンドック見学
- b) エゾ鹿事業についての講演会

9月15日

- a) オホーツク流水館見学
- b) ところ遺跡の森・ところ遺跡の館等見学

### (2)見学概要報告

#### ①網走港ケーソンドック見学

説明者：北海道開発局網走開発建設部  
 町田清一第1工務課長他



写真-1 網走港帽子岩ケーソンドック  
 土木学会選奨土木遺産に認定(H18)

網走港では、歴史的に港湾基礎構築の要となった、当時岩を掘り込んで建造(89年経過)した帽子岩ケーソンドック(写真-1参照)を見学(写真-2参

照)した。

特徴は、天然岩盤を掘削したケーソン製作専用のドライドックであり、寒冷地海洋環境下のコンクリートケーソンによる築港技術を確立した。

大正12年に竣工して(以降5回改修)以来450函余りのケーソンが製作され、現在でも使用されている。



写真-2 網走港帽子岩ケーソンドック見学風景

#### ②エゾ鹿事業についての講演会

講師：土田 好起氏、斜里建設工業(株)社長  
 演題：エゾシカ事業への想い  
 場所：網走観光ホテル



写真-3 土田社長の講演



写真-4 エゾ鹿ウィンナーソーセージの試食

最初は、自己紹介を行っていただきこの中で技術士挑戦にかけた熱い取組を語っていただいた。続いて地域産業の現状と建設業の関わりを概説された。

建設業経営の傍ら「エゾ鹿」事業も行っておられ起業(平成19年12月「知床エゾシカファーム」)した経緯から現状・課題等お話頂いた。起業については、①エゾシカの食害による知床の自然保護及び食肉の有効活用、②公共事業の激減による地域の雇用確保が背景としたのが要因である。

起業当初、エゾシカは家畜でも害獣でもない中途半端な分類で各種法規制が未整備であったため行政機関との連携によりエゾシカ独自の法規制を構築した。事業実施上の課題・問題点は、①安全衛生管理及び品質の劣る自家製(ハンター)の安価肉との価格競争、②捕獲の困難さ等が挙げられる。

取組対応としては、①エゾシカ製品の価値向上、②エゾシカ協会・食肉組合の強化(差別化)、③安全・安心(HACCP 認証取得：平成24年9月)なエゾシカ肉のアピール等の積極的な取組を展開している。



写真-5 交流を深めた懇親会のもよう

### ③オホーツク流水館見学

二日目のオホーツク流水館(写真-6参照)では、はじめに流水体験室(-15℃)を見学し、ここでは本物の流水を直接触ることができ、また、濡れたタオルが棒のように凍る「シバレ体験」もあじわった。

続いて流水のある網走の四季を大画面で臨場感あふれるハイビジョン映像を見学した。



写真-6 ナメダング、ふうせんうお、流水体験室

### ④ところ遺跡の森・ところ遺跡の館等見学

説明者：武田修氏、ところ遺跡の館所長

常呂遺跡は、オホーツク海岸に沿って、常呂川河口からサロマ湖東部に至る、湖岸砂丘上に営まれた約1800年前(本土では弥生時代末期)の集落跡に対して付けられた総称である。

この遺跡は、昭和32年の発掘調査以来、すでに2,500軒にも及ぶ膨大な竪穴式住居跡が確認されている。以前には、世界文化遺産登録暫定リスト入りを目指した時期もあり、現在も常呂川水系を中心に調査が続行している。これらの竪穴式住居には、擦文(さつもん)文化やオホーツク文化に属するものもあり、これらの文化相互の関係を解明する上でも貴重な遺跡とされている。



写真-7 出土し復元された土器(ところ遺跡の館)



写真-8 武田所長による説明(ところ遺跡の森)

## 3. おわりに

最後に宿泊研修会開催にあたり関係機関・関係各位のご支援・ご協力を得た。ここに感謝する。

岡田 包儀(おかだ かねよし)

技術士(建設/総合技術監理部門)

日本技術士会北海道本部  
オホーツク技術士会幹事  
北見工業大学

